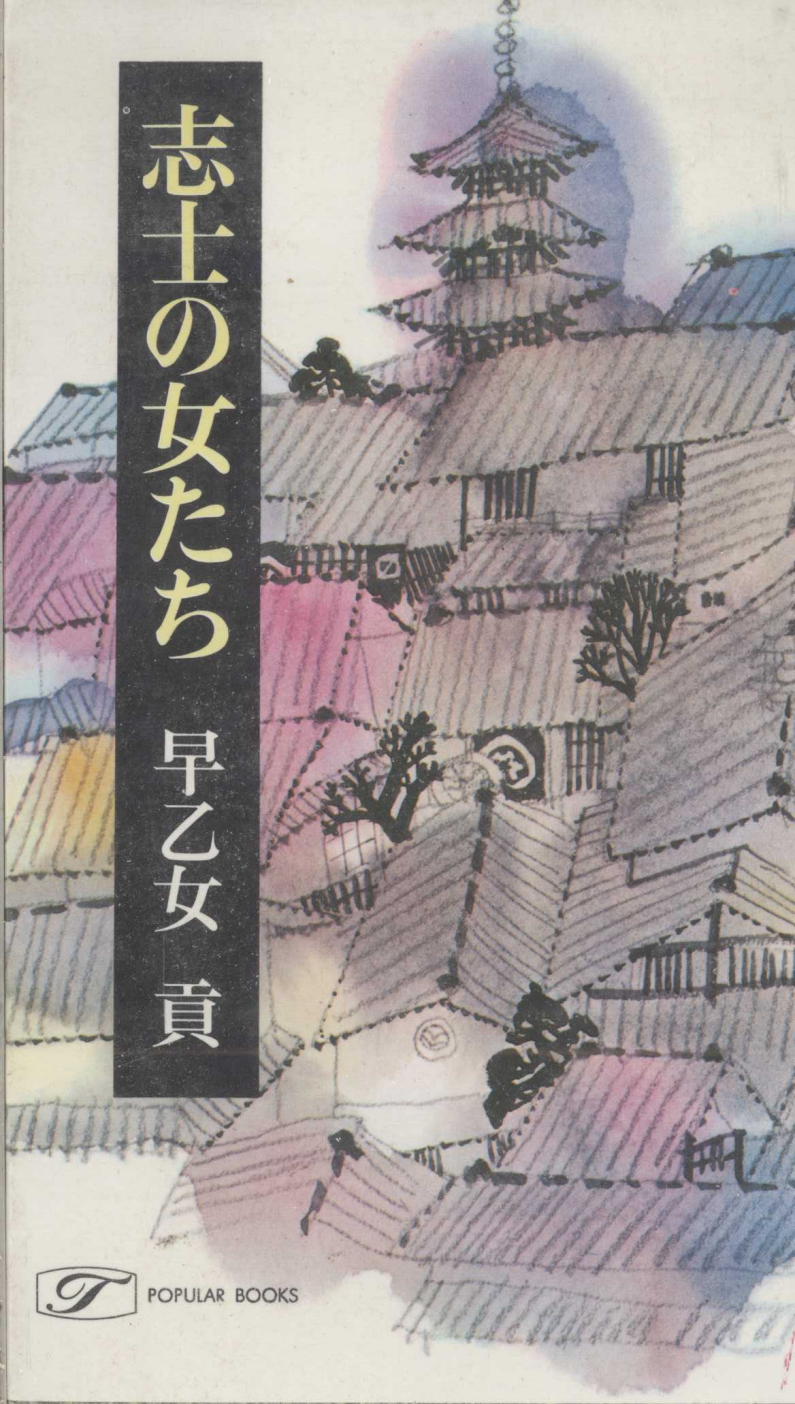
志士の女たち

早乙女 貢



POPULAR BOOKS

昭和48年5月5日　発行

著者　早乙女　貢

志士の女たち

発行者　矢貴東司

¥ 420.
〈検印省略〉

印刷者　堀内文治郎

発行所　株式会社　桃源社

〔103〕東京都中央区日本橋蠣殻町1—12
電話（666）4001番（代表）
振替東京64351番

落丁・乱丁の節は
お取替え致します

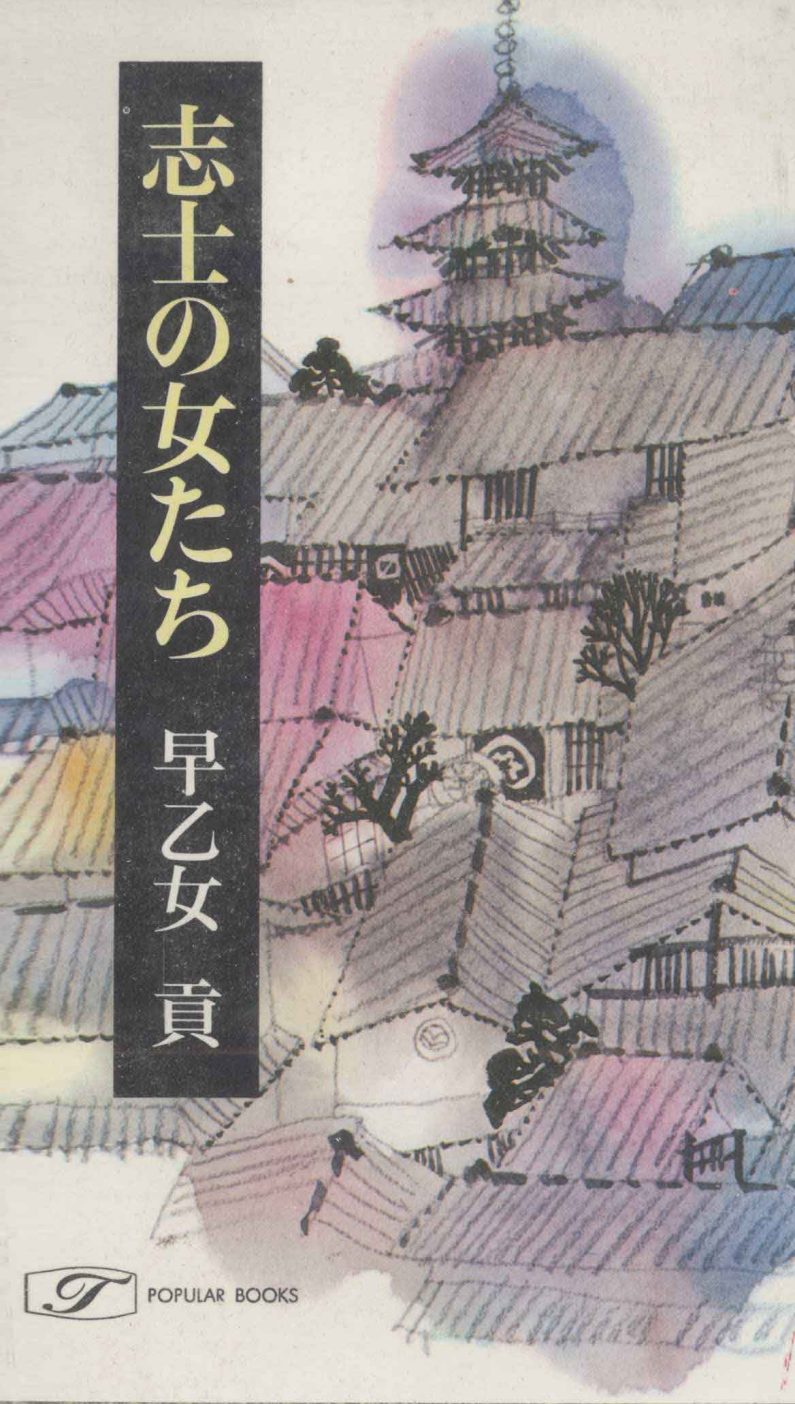
（用紙特漉・北越製紙・市川工場）

1973 ©

(分) 0293 (製) 073311 (出) 5180

志士の女たち

早乙女貢



POPULAR BOOKS

桃源社・刊 420円
0293－073311－5180

志士の女たち

早乙女　貢

（ポピュラー・ブックス）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

目次

第一話　志士の恋……九
第二話　洋妾坂由来……七六
第三話　江戸の攘夷党……九八
第四話　蚊帳の中……一二九
第五話　竜馬の女……一七五
第六話　彰義隊異聞……二〇四
第七話　筑紫おとめ……二三五

装幀　村上　豊
挿絵　東　啓三郎

志士の女たち

第一話　志士の恋

一

志賀流の居合いを得意とする香山惣兵衛が、棒鼻の提灯を斬って落すのが合図だった。

「狼藉者！」

どすんと投げ出された二梃の駕籠に、ぬかるみを蹴って二十幾つの影が、蝗のように飛びかかった。襲撃者の一人、遠賀丸猪之介は、ちらっと眼のすみに惣兵衛の初太刀を見るや、やりすごした後ろの駕籠めがけて、

「えい！」と、手槍を突きかけた。手ごたえ、と思うまでもなく、カラリと穂先は屋根へすべった。

「うぬ、痴れ者！」

ふりむいた武士の刀が、ケラ首を刎ね上げたのだ。

「ちえッ」

たたらを踏みしめて、すばやく繰り出した二の槍、すぽりと千段巻の下を斬り落されて、

「あっ」どうと、泥濘の中に転る。斬られる！　大上段にふりかぶって仁王立ちになった敵に、残りの枘を投げつけ、素早く抜刀して、そのもろ脚を薙いだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

「しゃつ！」その男はさすがに飛び退くや駕籠を背にして、
「どけェ者めらじゃ、名ば名乗れ」
手強し、と見て、ぱっと一同は離れた。全部無言である。ぐるりと円陣を作って、黒覆面の陰から眼だけ光らして、じりじりと二つの駕籠を守る四つの白刃に迫る。
斬り落されて、めらめらと燃えあがった提灯も、雨溜りにすぐ消えて、後は闇。空は重く、暗い。野も山も、墨壺に浸ったように黒い。ほんのいままで見えていた天拝山の峨々たる山容も、一陣の嵐気を残して闇の中に溶けこんでいた。猪之介は、同志の刃ぶすまに救われて立ち上った。
せかせかと、短い、喘ぐような呼吸を、右にも左にも感じた。そよ風になぶられるように一息ごとに揺れる白刃の波だ。
どうしても、おれの手で——恩賞と誇りが眼先にちらつき、意地が炎と燃えて、若い五体に漲った。
「間違いですむこっちゃなかぞ」
四人の薩摩隼人は口々に、
「お駕籠の中は余人にあらず」
「恐れ多くも高位のお方だ、無礼があっちゃならん」
それでも、一歩も退かぬ刺客たちに、耐えかねたように、一人が叫んだ。
「これにおわすは、三条実美卿、壬生基修卿なるぞ」
言いも終せず、だっと一人が斬り込んだ。
「承知の上だ」
と憤怒の声が、叩きつけるように闇をふるわした。その刺客は二合と刃交せずして、棒を倒した

ように、敵の足元に匐わされた。
それをしおに、入り乱れて、収拾出来ぬ混乱に陥ち入った。
怒号と、叱咤と、鋼の触れ合う音が、雨を呼んだ。無我夢中の時間だった。雨と刀と、泥と……闇くもの太刀打ちが続いた。
ふと気がつくと、猪之介の鼻先に、二梃の駕籠が据えられ、二人の人影が見えた。
何たる幸運！（しめた）猪之介は、刀を水平に構えると、
「お覚悟！」
と、その影にもろ手突き。
「推参なり下郎！」
はっしと中啓で払われた。
「うぬ」
息もつがせぬ二度目の刃風。中啓を叩き落した。続いて、三の太刀！
と、
「待て！」
飛礫のように、彼我の駈せ違う中に飛びこんで来た男が、はげしく猪之介に体当りをくれた。
「無礼者めが！」
声にも張りがあったし、闇を劃る肩巾も広く逞ましい。大きな男だ。
「御二方には御安心なされませ。黒田藩士、斎田要七郎でござる。それがしが駈けつけましたるからは、御心丈夫に——」

猪之介は、あっと叫んで、二三歩後退りした。

去年六月の大疑獄に連座して切腹した中老加藤司書一派の勤王無二の志士で、早くから脱藩して長州の奇兵隊に投じ、東奔西走、討幕に活躍していた男である。

それが、佐幕派で占められた郷土へ帰って来ようとは。無論、帰国したと判れば、直ちに捕われるはずだ。

「退け、退け！」

四人でさえ手こずっていた刺客たちは、一人が後ろを見せると、我さきにと逃げ出していた。半数に近い負傷者を残したまま。

暗殺に向った二十三人の内、十五人が傷を追い、残りの八人が追われる者のように、五里近い道を疾駆して、鳥飼の里、久野将監の別邸の裏口へ馬を止めたのは、戌の刻（八時）少し過ぎてからである。

刺客たちは、いずれも覆面して、簑に饅頭笠といういでたちだったが、下帯までぐっしょり濡れていた。

あるじの将監はこの雨夜に、寝もやらず待っていた。黒田五十二万石の佐幕派を牛耳る大立者でもう七十近い老人だった。

いわゆる乙丑の変で藩内の勤皇党、六十余人を一掃することに成功した彼は、幕府の意を汲んで、文久三年八月の政変以来長州に落ちまた大宰府に逃れて来た五卿の命をちぢめんと日夜劃策していたのである。

八人がおそるおそる入って来たのを見ると、
「如何(いかが)であった、首尾(しゅび)は？」
確信のある聴方なのだ。二十三人もの腕利きに、相手は公卿が二人である。十五人もの落伍者を出しただけでも、吉報をもたらしたものと見た。
「さ、火のそばへ寄るがよい。御苦労御苦労、やがて酒もくる。今宵は飲み明しで聴くとしよう」
一同はますます固くなるばかりだった。
将監一人が愉快げなのである。おそるおそる惣兵衛がおもてをあげた。その口からぼそぼそと、護衛に薩摩武士が附添っていたこと、あとから斎田要七郎が邪魔したこと。真暗で思いきり腕がふるえなかったこと等々……。
用意して来た弁明が述べられると、不快らしい青筋が、びくっと将監の額に走った。
そして、まわりくどい言葉の結論が、かすり傷もおわせず仕損じたと聞くと、
「たわけ！」
日頃の慎みを破って地声でがなり立てた。
「それでも武士か。きさまらは、どいつもこいつも何というざまじゃ。二十幾人という多勢で、たった二人の長袖を討ちもらすのさえ……たわけ者め。それでおめおめけが人を捨てて逃げて来たのか」
「は、それが、その……」
「どの面(つら)さげて、この屋敷の門がくぐれたことか。あきれはててものも言えぬわ。何のための腰のもの、何のための御扶持じゃ。恥を知れ恥を、腰抜けぞろいの禄盗人め」
かっとなった猪之介が、膝を動かして刀を掴むと、

「よせ」
と、惣兵衛が、その手を押えた。
そのとき、下婢を従えて、一人の女があらわれた。
「みなさま、お疲れでございましたでしょうねえ」
艶然と笑って、
「何もございませんが、熱いところを、ひとつ……」
九人前の膳部を揃えて、皆の前へ並べる。若者たちは恐縮して、膝を固くした。
「なんですねえ、皆さん、お若いのに……もっとお楽になさいな」
将監の妾ということは一目で判った。二十五六の、ぽってりとした豊満なからだから、色気が発散している。
眉も落さず、鉄漿もつけていないので、玄人あがりの身についた媚態が、若者たちには眩しかった。
「あら、どうなさいましたの」
若者たちの様子に不審気に眉をひそめて、彼女は将監を見た。将監もむっつりして、そっぽを向いている。
ホッホッホ、と、女はしなやかに動く白い指を口にあてて、笑った。
「なんですねえ、お通夜みたい。さ、お飲みなさいましな」
女が、甘酸っぱい体臭を匂わして、手近の猪之介にすり寄ると、
「うるさい、のけ」
手荒く猪之介の手が、豊満な姿体を、押しのけた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong